

アルパック ニュースレター



休日のお台場海浜公園（東京都）本文中に関連記事があります。

アルパック ニュースレター もくじ

1996年7月1日

- アルパック・ベンチャーの道程と展望 2
- 臨床地域プランナーとして 4
- 北淡町の震災復興の現状について 6
- 返還を目前にひかえた香港の発展 8
- 旧ディスコを心の休憩室へ 11
- 地元住民参加の公園計画づくり 11
- 心のテーマパーク 養老天命反転地 12
- 触感と点字 14
- 旧活版文化を追い続ける最新印刷技術 15
- 戦後50年不発弾撤去騒動記 16
- (株)アルパックインターナショナルの事務所移転と社名変更のご挨拶 16
- 新刊旧刊書評紹介 17
- まちかど 18

NO. 78

アルパック創立30周年へ

アルパック・ベンチャーの道程と展望

— < 営業 > の原点と指針 —

三輪 泰司

ベンチャー・ビジネスにとっても、その成立の必須要件は“営業”—この種の業態では“受注”であることは言うまでもありません。

当然そこには、受注のための競争がありますが、ベンチャーがベンチャーたるゆえんは、競争の仕方にも違いが現れてしかるべきです。ソフトに徹する

結果的には、競争を避ける、競争をしない方策ですが、私達は“Phase（位相・局面）をはずす”と言ってきました。

委託・受注型業態では、営業は相手＝発注者との関係で決まります。業界の常識は営業＝受注活動に2つの方法があることです。

第1は、独自の技術や知識を持って発注者にアピールし、売り込む方式。

第2は、人脈即ちコネを活かし、接待などの手段で発注者と関係を密にする方式。

元々、私自身は建築の出身で、東京での6年間の修行？の間に、建築設計事務所と建築施工業の世界を見てきました。施工業も本来技術を売る Fee（報酬）ビジネスだと思っていましたが、日本の建設業は Margin（利鞘）ビジネスに引き込まれています。明らかにフィー・ビジネスであるはずの建築設計の方がもっとおかしいことに、これは会計法の「契約の方式」の解釈と発注者の選定審査能力に問題があるのですが、価格の下限設定のない競争入札になったりして（未だに多くの地方公共団体で是正されていません）厄介なことにそれに餌い慣らされた建築事務所が、規模の大小を問わず一杯あって“第2”型の営業活動方式が優勢になります。その行き付く先

がどうなるかは、よく知られている通りです。

そのような競争に巻き込まれたら、職能の倫理を高め、職業の社会的地位を強めるためにならないだけでなく、弱小資本で、立ち上がり期のベンチャー・ビジネスにとっては、たまったものでありません。

本来の新しい技術開発力を活かすために、“ソフト”技術を指向したのは、Phase をはずすための必要に迫られた選択でしたが、これは真理でした。

自主・自立の意味

新市場を開拓するとか、市場の Niche を見つけるとか言われます。ニッチは隙間と訳されたりしますが、私達は本来の意味の“適所”と理解しています。

いかなる資本系列からもインデペンデント—自主・自立であり、中央ではなく地方から起こったベンチャーであることをわきまえて、適所を見つけ、拡大して行くことが、営業における基本戦略でした。

創業の始め、シンクタンクとは何か、コンサルタントとは如何にあるべきか、と性格規定・職能倫理などを議論したことをお話しし、シンクタンクの定義をご紹介しました。この種の仕事は委託を受けて始まるサービス業ですから、或る系列資本にサービスする、地方公共団体はじめ団体、業界或いは特定の企業にサービスを提供するのは当然です。

しかし、ベンチャー本来の特徴を発揮するには、どのような姿勢・視点でサービスするかがポイントであり、代替の提示即ち、時には批判と、代替案揭示もシンクタンク本来の

使命であると申しました。この開発は修正した方がよろしい、ここには手を出すべきではないと言わねばならないこともあります。

中には、それならもうお前さんには頼まないよ、と言う委託者もあるかも知れません。

多様な領域・多彩な人材

アルパックの特徴は、間口が広いこと、新しい未知のことで何とかわしてくれることという評価を頂いています。

創業の始めから、こんにちのマルチプルな業務領域は出揃っていました。

それは、新分野へのチャレンジでもありますが、未成熟な市場性と、委託者から「お断りだ」と言われる場合に備えての自衛本能の面もあったと思います。大阪（1972年）九州（1976年）名古屋（1982年）東京（1987年）と地域事務所を展開して行ったのにも、リスク分散の側面もあります。

アルパックの社員構造の特徴は、出身地・出身校がナショナル・ワイドであることです。

地域情報と言っていますが、地域計画・建築設計には土地の風土に通じているべきです。

“故郷のために” 帰った社員が地域事務所をつくり、時間が経つとGemeinschaft（生活共同体）に家族共々根を下ろし、人々の信頼を得て行きます。環境科学部門は業務を通じてGesellschaft（利益共同体）に根を張った例です。1972年創設。早すぎて市場未成熟で苦労しましたが、いまでは“環境”はあらゆる分野で欠かせません。大きな機器類は持たず地道な調査とシステム開発など、ソフトに徹した身軽さも幸いました。

ボランティア精神

実証的批判や代替案には、情勢を見る確かな視座と強い創造力が必須です。それには厳しい努力を要しますが、喜びもあります。

創業の翌年から3年間の「21世紀の設計」

は、ビジョンを提示する“構想計画”のモデルでした。西山卯三先生を総括責任者とする関西グループの受託機関として、47専門分野

170余名の先生方の討議を組織し、国土・大都市圏・地方圏の計画作成等、ハードな仕事でした。おかげで爆発的にネットワークが拡がりました。何より、広い視野で将来を見る科学的方法を学ぶことが出来「計画技術」開発へのエポックとなりました。内閣審議室から調査費を受けましたが、経営的には大変でした。しかし、佐藤内閣には、すごいことをやらせて頂いたものだと感じています。

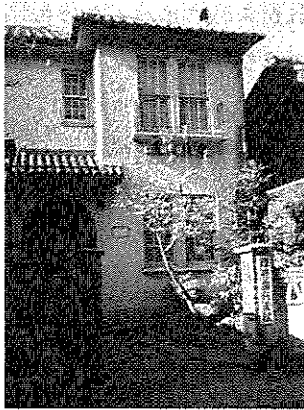
1970年。創業3年目。高度経済成長の盛り。世間が万国博で浮かれていた時、中国新聞のルポ記事で「過疎」という言葉に接しました。

隠岐の計画も、西郷町の委託を受けましたので全くのボランティアではありませんが、産業（畜産・観光）、文化（民謡・祭）、基盤（道路・港湾）等々、離島振興法の時限を前に、島の人々の目線に立って、共に汗を流しました。21世紀にはゼロになるかと心配しましたが、隠岐は2万6千人で踏み留まっています。しかし既に世代再生産能力を失った農山漁村には、第2次の過疎化が押し寄せてくることを、忘れてはならないのです。

関西文化学術研究都市の構想と推進のスタートは、1977年2月。調査懇談会準備会から懇談会へと、何処からの委託も受けず、奥田東先生はじめ、先生方には手弁当でしたが、経費だけで初年度660万円、2年度2000万円。創業10年目にはボランティア精神を支える投資力もついてきていました。

社会の求める課題解決に挑戦し、提案し、発信することが、即アルパック型“営業”ですから、役員等の職務上の責任はありますが、未だに専任の“営業部”はありません。

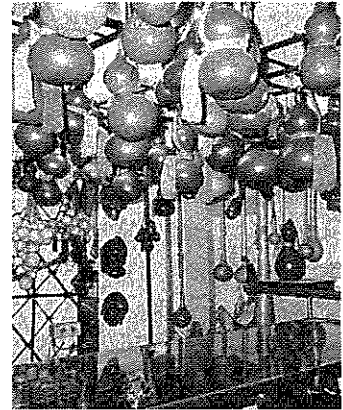
（代表取締役会長 みわ ひろし）



湖国百選にも選ばれているウォーリス設計の名建築跡（空き家だった）を活用し、まちづくり塾「商徳塾」を開催しています。



今年1月にオープンした私設「ひょうたん博物館」



店内には千点に及ぶひょうたんが。

ムに着目し、生きている地域を診断し処方箋を書くには、プランナーは自らの体全体でもっと地域の歴史風土や地域文化、人間性や人間関係を学ばなければならない。まずもって地域には頻繁に足を運び、関係者と十分にコミュニケーションをとることはもちろんだが、直接的に課題解決に通じる情報ばかり追うのではなく、例えば経済振興がテーマでも、地域の歴史書や先人の伝記を読んだり、伝統的な祭り・行事に参加したり、ぶらりとタウンウォッチングをしたりすることが必要だといいたいのだ。文化振興の場合はその逆を考えていただきたい。

智・感・情・体・意を鍛えよ

米国医学界では、優れた外科医が人間の一部分のみを見るあまり、人格を持つ人間全体が見られなくなるとの危機意識から、宗教や文学、心理学などの人間学を学ばせるようになりつつあるという。その警鐘は全ての技術者、研究者に通じるのではないかと思う。

別の言い方をすれば、コンピュータを中心にますます知識・技術に頼りがちになる己れの「智・感・情・体・意」をもう一度磨きあげることが必要だということだ。オリジナルな智恵、豊かできめ細かな感性、人間的な情

報ネットワーク力（直接の情報を無限大に知ることより、種々の知識を持つ多様な人間を知ることの方が大事）、健全で持続力のある体力と巧みな人間技、自分なりの明快で堅固な意志（ポリシー）を鍛えることが、たちまちの文章力や設計等の表現力以前の要件としてあるのだ。

かくして、旅をしたり、美術館や映画館に行ったり芸術観賞をする。絵を描く、音楽を奏でる。小説やドキュメンタリーを読む。恋をする。家庭を築く。育児や介護をする。趣味をもつ。いい意味で失敗経験をするといったことが、臨床地域プランナーにはぜひとも必要である。

アルパックへの期待

決して、古い職人芸的プランナー像を懐かしんで言っているのではない。科学・技術・文明が行き着くところまで行き、環境、人間性、経済、生活面でさまざまな限界に達している今日こそ、人間生活の原点に立ち返って地域づくりを考える時代になったからこそあらためて訴えるのであり、臨床地域プランナーとしてのあり方は次代を担う若き地域プランナーそのものの課題と思うのである。

幸いアルパックは私の好きなプランナーの

多いシンクタンク・コンサルタントである。いや、むしろまだ駆出しだった頃、社外にいる私をそのようなプランナーに育ててくれたのがアルパックだった。その良さはいつまでも大切にしてほしいと願っている。

先を急ぐことも必要だが、アルパック30周年史の中で頑張ってきた先輩達の人間ドキュメントをこの機会にゆっくり紐解いて学

びあう中に、これからのアルパックのあり方を考えるヒントがちりばめられていると思う。ぜひ、そんな特集冊子をまとめられたり、社内シンポジウムを開いてみてはどうでしょうか。アルパックのますますの発展に期待しています。

(滋賀文化短期大学教授・地域プランナー

おだ なおふみ)

北淡町の震災復興の現状について

石本 幸良

阪神淡路大震災から約17ヶ月が経過した北淡町の復興の現状についてご報告します。

震災直後の町の状況

震災から1ヵ月目の2月17日に北淡町に入りました。ちょうど昼12時に役場前のバス停に到着したのですが、その途端にサイレンが鳴り、1分間の黙祷に遭遇し、第一歩目で身の引き締まる瞬間を味わいました。

洲本からバスで町に入りましたが、県道沿いの集落の被害に驚くばかりで、それも北上するほどに倒壊した建物が増え、集落の細い道はまだ建物が壊れたままの光景でした。取り壊し家屋数は1800件にも及び、世帯数の半数に及んでいます。倒壊家屋の撤去作業は自衛隊の協力により、北部の集落から始められており、富島地区ではようやく集落内の道が確保された時でしたが、倒壊した建物はそのままの状態でした。

震災1週間目に阪神間の市街地を調査した時には鉄骨造や鉄筋コンクリート造の無残な姿や一面焼野原となった市街地にただ唖然としましたが、北淡町の木造ばかりが折り重なるように倒れた光景はどこか無常感が漂い、自然の脅威の前での人間の力の弱さを認識するばかりでした。倒壊した建物が一面広がる

割には犠牲者の方が少なかったのは、震災直後の住民の方々の一致協力しての救助活動とともに、プロパンガスの音とにおいをたよりに、ガスの元栓を締めて火事の発生を食い止めた結果とお聞きして、住民の方々の連帯感の強さとあまりにも都市化しすぎた市街地への警鐘とも感じとれました。

震災直後の復興への動き

町では4月に都市計画区域の編入を予定しており、各世帯に郵送する関係資料の封筒詰めまで終わっていた所への震災でした。震災直後の復興への動きとしては2月7日に町の高沿いの集落を中心に都市計画区域の指定、富島地区では2月17日で建築基準法84条に基づく建築制限区域指定を行うとともに、土地区画整理事業の実施に向けての住民説明会やアンケート調査の実施を行い、3月17日に北



救助跡が生々しく残る倒壊建物（富島地区）

淡土地区画整理事業等の都市計画決定が行われました。以後、富島地区では事業決定に向けて、住民との話し合いが続けられていますが、住民の事業に対する賛否両論からいまだ事業決定には至っていません。人口1万人余りの町で、約21haにも及ぶ都市計画事業の実施でもあり、町の都市整備事務所の職員の方に加えて県及び周辺市からの応援を得て精力的に取り組まれています。

富島地区以外での復興への取り組み

北淡町は北から野島地区、富島地区、斗ノ内地区、育波地区、室津地区の集落が立地していますが、富島以外の地区については震災1ヶ月後の現地調査において、被害調査、残存建物の状況、道路現況及び資源調査などを行い、4地区毎に被害が集中している箇所では面整備として土地区画整理事業と密集住宅市街地整備促進事業の合併事業や住宅地区改良事業の検討、比較的被害が分散している箇所では密集住宅市街地整備促進事業や住民の自力復興を誘導する手法の検討など、さまざま

な方法と事業費の算出を行いました。

しかし、現在整備手法が確定しているのは野島地区での漁業集落環境整備事業だけで、その他の地区については地元との話し合いを続けている状況です。

住民の復興への動きと課題

震災復興への町全体としての取り組みに加え、自力再建も順調に進んでおり、確認申請状況を見ると、震災以後の4月からは毎月ほぼ同数程度の申請が出されています。

各集落は典型的な漁村集落の構造を色濃く残し、海に平行する比較的広い県道や中道に対して、「網上げ道」と呼ばれる細い路地が直角に海に向かい、その沿道に木造住宅が密集しています。ほとんどの道が2m未満の道路や通路であり、敷地規模もそれほど大きくなく、建築基準法の接道要件が足かせとなって、再建できない敷地も多く見られます。

地元との話し合いでは必ずこの4mの道路問題が焦点になります。以前は自由に建てられたのに、何故震災を契機に建てられないの

(表) 地区別の取り壊し件数(平成7年3月11日現在)

地区名	仁井	野島	富島	斗ノ内	育波	室津	生田	合計
人口(人)	962	1,312	2,459	2,208	2,961	2,097		11,999
世帯数	289	383	809	820	806	618		3,725
取壊し件数	64	253	592	256	312	282	87	1,846

(人口・世帯数は平成2年国勢調査)

(表) 震災以後の建築確認申請状況

(上段:総数, 下段:住宅)

	6年		7年						8年	
	2~3月	4~5月	6~7月	8~9月	10~11月	12~1月	2~3月	小計	4~5月	
都市計画区域内	62 32	87 63	74 62	64 52	81 74	57 52	66 56	429 359	56 50	
都市計画区域外	0 0	3 3	2 2	3 3	5 5	2 2	4 2	19 17	1 1	
総計	62 32	90 66	76 64	67 57	86 79	59 54	70 58	448 376	57 51	

かと。納得しえない思いは集落の状況を見ていると理解できるところで、都市的な市街地での整備手法をそのままに導入することが果してよいのだろうかと考えさせられます。

それでも話し合いを続ける中で、住民の理解は高まっているのですが、今度は建物はセットバックしても境界にブロックを積んで実質の道路が確保されないことが問題となっています。以前は細い路地でも軒先を自由に歩けたのだが、建物が下がって逆にブロックを積むために、以前よりは狭くなったとの意見も聞かれます。住民から強い指導を望む声も多く、町では指導の限界を認識しており、後退部の舗装整備や生け垣に対する補助、及び後退部分の固定資産税の免除などを盛り込んだ要綱の検討を急遽行っています。

このように住民との話し合いで出る個々の問題に対しては集落全体の視点を基本にしつつ、できる限りの支援策を講じて、自力再建のための状況改善を図るとともに、補助事業

の導入のための集落全体の合意形成に向けた精力的な取り組みが求められています。

今後の取り組み

震災から1年半を迎え、いまだ復興に向けての事業手法が確定しない状況です。地元との話し合いではようやくまちづくりの話ができる状況ができたところです。自力での再建も順調に進んでおり、震災直後のような面的な整備手法ではなく、自力再建を集落全体でトータルに誘導していく方法を模索している状況です。しかし、震災から1年を経過して逆に事業採択要件が厳しくなり、事業導入のハードルが高くなる傾向があります。

迅速な事業の導入だけがまちの復興につながるわけでもなく、また、住民と行政の対立場面ばかりを取り上げるマスコミの報道に振り回されることなく、せめて震災以前の静かな生活環境をどのようにして取り戻せるかが、今後とも大きな課題と言えます。

(京都事務所 いしもと ゆきよし)

返還を目前にひかえた香港の発展

金井 萬造

天候不順、香港は発展するか

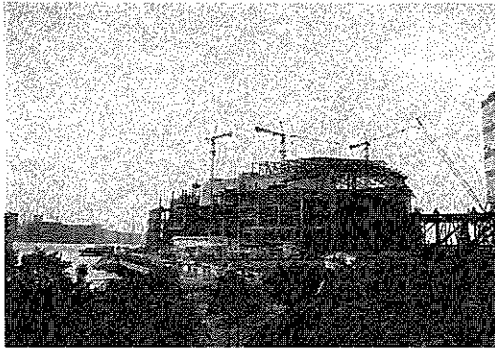
来年6月末で中国に返還される香港の状況を見ておこうと香港を訪問される方も多いと思います。私もこの4月に国際コンテナ輸送のハブポートとして発展を続ける実情調査に訪れてみました。

滞在中は、一度も太陽を見ず、気温は低く天候不順でしたが、色々な経験をしました。返還を目前にひかえて着実に進む都市建設と拠点施設の整備、住民生活の活発でたくましい香港の展開には目をみはるものがあります。

また、高度成長を続ける国の一面も見ました。折しも訪問を予定していたコンテナター

ミナル会社でストライキが発生しヒアリングが不可能になりました。下請け子会社の労働組合が親会社に賃上げなどを要求してストライキに入ったのです。香港政庁は労働組合のストライキに対し「自分の会社の経営者と交渉せよ。」と言って門前払いの対応で以後イースターの休暇に入り早急な解決が望めません。そのおおりでコンテナターミナル会社の訪問と見学はキャンセルされてしまいました。

香港経済は、インフレで、賃上げ、コスト高の様相を示し、生活水準の向上とともにその経済活動のメリットを減らしてきている印象を受けました。



建設中の国際会議場

香港はアジアのハブポートの道を歩む

神戸港は昨年の阪神・淡路大震災で施設が打撃を受け、国内外でのポテンシャルを落とし、回復できない現状にあります。その対策の参考に香港のコンテナふ頭とコンテナ輸送に着目して、なぜ香港がアジアのハブポートなのかを理解するため、事前に専門家の意見をお伺いしました。

その中で香港は中国の中継港になっていることに着目する視点、港利用の荷主の立場に立ったグローバルな国際輸送の視点、港の背後圏の経済活動と港への集荷の視点、香港周辺の中国の港湾建設と物流動向の視点、船会社の動向の視点などいくつかの大切な視点を指摘いただきました。

神戸港は20年前集荷の4割を韓国が占め、震災前はその23%を中国が占めるなどアジアのハブポートの位置を確保していました。しかし、今日では、それぞれの国の港湾整備が着々と進み、集荷は難しくなっています。

このような歴史的な経過の中で、今後国際輸送ネットワークの上で立地上の有利性の活用と努力をしていくことがポイントと理解できます。

一方で、香港は着実にアジアのハブポートの道を進めています。その内容を少しでも解明するのが今回の香港訪問のねらいでした。

コンテナハブポートの中身・仕組み

ハブポートとは、貨物が集散される拠点の港のことです。

香港では、物流の専門家にお会いする機会に恵まれました。香港のハブポート化の中身の概況は次のような仕組みになってきているとのことです。

①情報化時代に対応して国際的海上輸送のグローバルネットワークを構築し、巨費を投じてコンピュータ化が進んでいる。

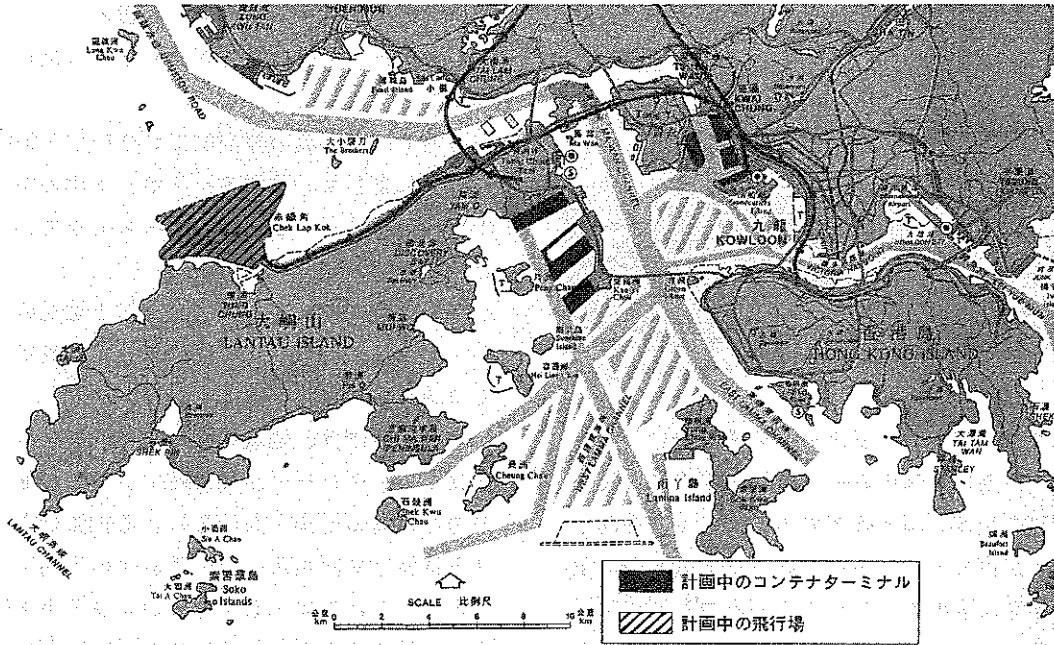
現在の段階は、地域レベルでのシステム化が完了し、グローバルな段階で、投資の面での船会社間の連携・共同化による投資額のコスト低減と共同利用のシステム化の方向にあるということです。数十万個のコンテナを管理・輸送することから情報化対応が重要になってきています。

②物流情報センターとして香港の位置がますます上昇している。物流量から見て中国の経済活動の大きさがものを言っていて、企業の活動も利益追求の商取引を求めて香港に集まってくる。それには、香港の輸送コストの低さもメリットになっている。

シンガポールはこの視点から見ると今後大きな伸びが望めないということになる。

③物流量の多さと輸送コストに各船会社が対応して配船・寄港する。日本の港湾でのコストは圧倒的に高く不利であるが、香港でも人件費が高くなってきておりデメリット要因であるが、ともかくも中国の経済活動による発生・中継貨物量の多さが企業活動の要因となっている。

④社会資本整備と利用の考え方の相違が影響している。日本の場合、社会資本の公共中心の整備と民間の施設利用が基本であるが、香港では、民間企業による社会資本の投下と資金の回収が基本のため、施設の稼働率向上第



出展：香港政府のポートベロップメントビューローの資料

一主義の無秩序なシステムが現在のところ効果をあげている。

中国返還時期を乗り越えて発展する香港

香港政庁を訪問し、現状とビジョンのビデオを拝見し説明をうけました。

香港の昨年（1995年）のコンテナの取扱量は、20 tコンテナで1260万個に相当し、世界一の港湾です。

その85%は中国広東省の中継貨物で、面白いことに沖どり（港の中に停泊する船での荷役）が全体の1/4の300万個を占めていることです。

将来の施設の整備として2000万個対応のターミナル10及び11地区の計画が確実となり、3000万個対応の計画を、中国の経済開発状況と港湾整備を見て対応することにしているとのことです。

この計画は、非常に大きな計画ですが、中国と共同連絡会議を設置して調整を進めています。

将来の見通しとして中国側は自国の発展のために香港の港湾施設が必要と考えていて、中国返還後も香港の港湾は発展するだろうと見えています。

香港のたくましさを実感

香港訪問は、コンテナターミナルの突発的ストライキで予定を変更し、文献の収集と観光、食事、買い物など探訪に切り換えました。イースター休暇と墓参り休日で沢山の香港人が国境を越えて中国に入境する姿を見て、1年後の中国返還後も着実で、めざましい都市経済活動が展開されるものと実感しました。

香港の人々が、一日一日を大切にたくましく生きようとしている姿に接し、日本の都市・地域もこのバイタリティに学び再び活力を取り戻して再生させていきたいものだと思って帰国しました。現在、私の机の周囲には沢山の文献が山をなし、今後の解説で頭を悩ませています。

（代表取締役社長 かない まんぞう）

旧ディスコを心の休憩室へ
償却を前提としたリニューアル事例の紹介
尾関 利勝

●変化の激しい商業界

今、「持続するまちづくり」が一つのキーワードです。持続するまちづくりにとって、やっかいな問題は商業界の変化です。1960年代のスーパーマーケット出現以来、小売商業は極めて短時間で立地と業態が変化し、同様に飲食店やアミューズメント業態も激変しています。かつて「ジュリアナ東京」が話題になった頃、業界のある専門家は3年持てば好いだろうと言っていました、その通りになりました。それほど商業、とりわけ流行を追う業態は変化が激しいと言えるでしょう。その様な商業環境の変化を見越しながら、柔軟に対応して上手く使いこなし、多様な客層の支持を得ている例があります。

●ディスコ跡のリニューアル

名古屋栄の南東、久屋大通りから東に入った所に「心の休憩室・ガルーバ」と言うレストラン・パブがあります。元々ディスコだったのをダンスフロアをそのまま活かし、3年で償却する内装改修を前提に、紗のカーテンで区切られた座卓式4～6人のブースを設置、卓上のろうそくが映える程度の照明に香を利かせ、静かに流れるインド音楽で落ち着いた環境を演出した店づくりが特徴です。現在はインテリアのマイナーチェンジが行われたため開店当初とは少し変わっています。

客が嫌がる要素を排除するという店づくりのコンセプトから、ブース毎に置かれた鈴や鐺を鳴らさない限り注文を取りに来ないシステムです。メニューはこの店独自に開発した優しい味に工夫した多国籍料理の他、一通りのアルコール類が取りそろえてあります。ち

なみに私の好物は毛沢東チンゲン菜とタジマハール・ビールです。営業は夜明け前頃までやっていること、落ちついた環境と安価さから若者やカップル、女性だけのグループなどが多く利用している様子です。紹介されてから既に5年以上経ち、3年でつぶれる事はなく、最近では並ばなければ入場出来ない程流行っています。

●出会いの理由

以前、ある勉強会で飲食店業態の企画・運営を専門とする若いデザイナーに紹介されて以来時々利用し、物好きな方が来られた時にご紹介していますが、年代や性別を超えて好評です。この店を紹介された理由は、私達が望む①客単価が3千円以下で済むこと、②仕事が終わって夜中からでも行けること、③少人数でディスカッションできる静かさがあることの3条件に合致していることでした。

(名古屋事務所 おせき としかつ)

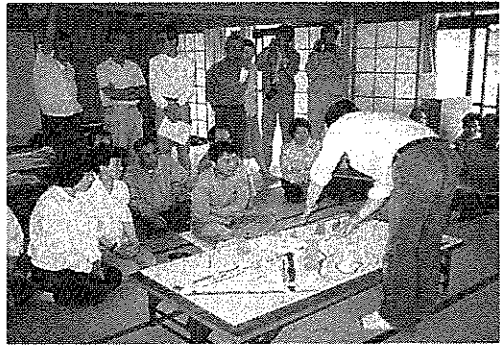
地元住民参加の公園計画づくり
～舞鶴市与保呂地区～
石川 聡史

先頃、京都府舞鶴市の与保呂地区という農村集落が、京都府の「府営ふるさと・水と土保全モデル事業」のモデル地区に指定され、地元参加型のワークショップ手法を用いて公園計画をつくることになりました。我々の役目は、京都府から委託を受けた「府営ふるさと・水と土保全モデル事業与保呂地区計画策定業務」として、基礎調査等の他に集落ウォッチングや公園の模型作成等一連のワークショップの運営を行うことです。

この集落では以前から集落ウォッチングや勉強会など住民によるむらづくり活動が継続的に行われており、全員参加のもとで集落ウ



模型づくり風景



できあがった作品発表会

ウォッチングから公園の模型作成まで、スムーズに進みました。

当日は、以前実施した集落ウォッチングやウォッチングマップづくりなどを踏まえた最後の仕上げとして、「こんな公園がほしい」という思いを形にするため、公園の模型作成に取り組みました。

計画対象地の3ヶ所について、1ヶ所それぞれ8人程度のグループに分かれ、「遠くからでも見えるオブジェのような石を置きたい」「くつろげるようにベンチや芝生広場がほしい」というように公園にほしい機能を挙げると、次に実際に模型づくりに入ります。紙粘土やいろがみ等で築山や木、柵などをつくっていったのですが、次第に童心にかえてきたのか、外で雑草を抜いてきて木の代わりにしたり、いろがみで凝った枝垂れ桜をつくったり。

模型をつくりはじめて2時間後には、どのグループも行政の方々も驚くほど見事な模型が完成し、参加者全員、完成した模型や、集落ウォッチングから今日までの一連のワークショップに関する感想を述べました。「与保呂の新しいところを知るのにいい機会となった」「農作業の合間で忙しかったが、楽しみながらいいものができた」など、みなさん楽しく取り組んでもらえたようです。また、「どれだけ実現するか楽しみ」など、今回の成果がどれだけ形になるのか、期待する声も聞か

れました。

私自身、業務としてワークショップ形式での計画づくりに取り組んだのは初めてだったのですが、地元の方々の自分達の生活環境への関心の高さと、一連の作業が円滑に運んだことに驚かされました。これは、以前から自分達の環境づくりに取り組んできた蓄積があったからこそその結果と言えます。人々の地域環境への関心が高まりつつある中、今回のように地元住民がまちづくりに参加する機会はきっと増えてくるでしょう。そうした場合、単発で終わるのでなく、今回のように地元住民が日頃からまちづくりに参加しつづけるということが大切で、そのためにも、継続を支援する仕組みが重要となってくるのではないのでしょうか。

(京都事務所 いしかわ さとし)

心のテーマパーク 養老天命反転地

藤 正三

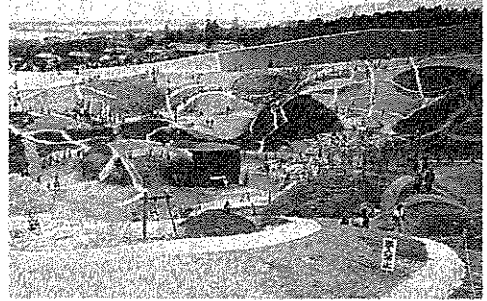
養老天命反転地は養老の滝で知られる岐阜県養老郡養老町に、県が総工費12億円をかけて、芸術家の荒川修作氏と詩人のマドリキン・ギンズ氏によって建設され、昨年10月4日にオープンした面積約1.8haの大規模な楕円形をしたすり鉢状の公園（芸術作品？）である。この養老天命反転地については、日経ア

ーキテクチャー、ジャパンランドスケープ等の各種雑誌等に設計者の思いや施工プロセス、利用者の評価等が取り上げられ、かなり知名度が上がっている。そしてオープン半年で約17万6千人の入場者を数えている。

先ごろ、ここをはじめて訪れたが、暖かくなった日曜日の午後とあって、岐阜をはじめ、名古屋、尾張小牧、三重ナンバーの車が目立ち、中部圏の行楽地として多くの子ども連れの家族、カップル、養老の滝帰りの観光客らしき高齢者などで賑わっていた。そのため入口は長蛇の列で、15分くらい待ってやっと入れるくらいの盛況ぶりであった。

中に入ると、周囲に見える穏やかな丘陵地や芝生広場の雰囲気とは一変し、スケールの大きさ、急勾配、一風変わったオブジェなど、おもちゃ箱をひっくり返したような、何が何だかよくわからない状況であった。園内は急勾配のすり鉢状の窪地に、小山と窪みが対となって点在し、路が傾斜していたり、曲がっていたり、歪んでいたりと、平衡感覚がなくなるようになっていた。また園内には哲学的にネーミングされた「極限で似るものの家」、「精緻の棟」、「陥入膜の径」などの施設（オブジェ）があり、入口で渡されたパンフレットに書かれている詩的な使用方法に従って遊んでみたが、生まれ持った感性の低さなのか、「何?・・・」といった理解しがたいものばかりであった。

また、ここは急勾配で滑り易いことから、けが人が続出するのも仕方がないと思った。そのため公園管理事務所では、運動靴やヘルメットを無料で貸し出したり、危険なところには杭を打ちロープを張って、手すり代わりにさせたり、立入禁止にさせたり、また警備員を数人配置させ立入規制をさせたりと、安全面での配慮があとからなされ、公園管理者



多くの人で賑わう養老天命反転地



急勾配を滑り降りする子供たち

の苦勞が伺えた。

やはりここは公園ではなく、芸術作品であり、それも鑑賞する作品ではなく、動き回り体全体で体感する作品であると感じた。その辺りが利用者の立場や、周囲の環境や景観への配慮無用な面であり、概念的に公園とは違う、芸術作品として言われる所以ではないだろうか。しかし園内で子どもたちは壁の下を潜ったり、壁の隙間を通ったり、急勾配を滑り降りたりと、工夫しながら遊んでおり、子どもの創造力を育む機能は担っている。けれどもそれ以外の人たちの反応は私の聞く限り、「何これ?」、「つまんない!」と、あまり評判が良くない。

現在はものめずらしさから来訪者は大勢いるが、今後、リターン客をつかめるかどうかは相当難しいと思われ少し心配になる。しかしこのような先進的な試みを岐阜県が行なったことは画期的であり、公園行政に一石を投じるものになったと思う。

このような発想の転換や大胆さを生かし、

人々の創造力を育むような公園づくりを今後
も積極的にしていただきたい。そして私もこ
の天命反転地から、結果はどうであれ、何事
にも前向きな姿勢で取り組むことの重要性を
少しではあるが、学んだような気がする。

(京都事務所 ふじ しょうぞう)

触 感 と 点 字
松木 一恭

先月、点字案内板の改修にたずさわった際
に、視覚障害者の方の意見を把握する必要が
あり、視覚障害者(盲人)の方と点字シール
などについて、協議を数回行いました。その
なかで、特に感じたこととして、触感の難し
さや簡潔された情報量の重要性などがありま
した。

触感の難しさ

人は視覚的動物と言われているが、視覚障
害者(盲人)は、必須な情報を皮膚感覚の触
覚に頼らざるをえません。視覚は、視野に入
った像を瞬時にオートマチック的に合成して、
自分のいる場所を確認し、イメージなどを作
るが、触覚は、触れた部分をマニュアル的に
合成し、頭のなかで統合され依存させなけれ
ばならない。触覚だけにたよると、一定の脳
力で外界の事象を自分の中に再現するのは、
相当の訓練や集中力が必要であり、健常者の
理解をはるかに越えているということです。
さらに、視覚障害者は、障害の程度や障害の
原因、年齢、歩行訓練歴などにより、触覚の
感覚がかなり個人によって違うということ
です。

好ましい点字シールや点字タイル

すべての視覚障害者のニーズを満足するこ
とは、困難であるが、利用者の多様性やいか

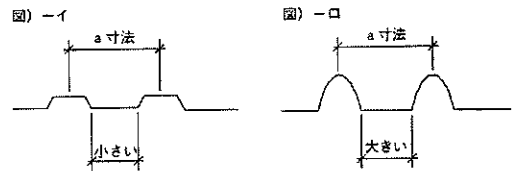
に早く情報を確実に伝えるかを考える必要が
あります。そのためには、点字と点字の間隔
が一定あり、点字の山がはっきりしたもので、
情報量をなるべく少なくしたものとすること
が大切であるということです。

点字シールにおける点字の山ですが、(図)
-イより(図)-ロの方が好ましく、点字の材
質として、すり減らない(アルミなどはすり
減る)ものが好ましいということです。

点字タイルについては、滑らない材質で
(ステンレス等はすべり危険)誘導ブロック
と位置ブロック(警告用)との違いの規定を
きちんと整理し、誘導ブロック等をたくさん
設置するのではなく(日本においては、障害
物が多く危険)、どこを歩いても点字ブロ
ックにあたるような敷きかたが好ましいと言
うことです。(図)-ハ参照

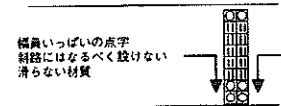
今後、設計者の理解のもとで、障害者と健
常者にとって危険なものとならない点字方法
を細部にわたって基準化する必要があります。
そして、視覚障害者に対する訓練を行うこと
が望まれます。

(京都事務所 まつき かずやす)



塗料など付けずに、透明なすりへらない材質(透明アクリル等)を使用

(図)-ハ わかりやすいと書かれている点字タイルの設置



旧活版文化を追い続ける最新印刷技術

重本 幸彦

まだ現役だった活版印刷

最新技術を駆使している大阪の中堅印刷工場ビルを見学させてもらった。

ところが、まず案内されたのが活字棚の並んだ広々としたフロアだった。隅の方で年輩の職人さんが二人で活字を組んでいた。30年以上昔の印刷工場にタイムスリップした感じだ。

古文書などの旧漢字や旧仮名遣いの本など、どうしてもという特別注文が細々とあるらしい。

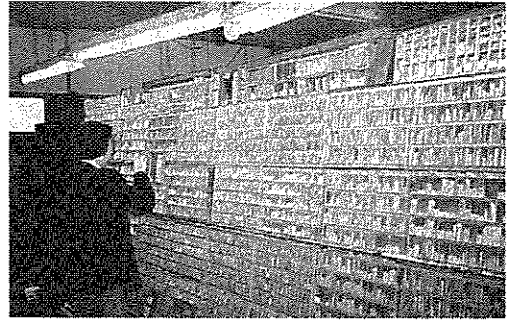
説明を聞くと、活版印刷は手作りそのものだけに行間や字間を微妙に調整したり、鉛活字から特殊漢字を合成したり、その自由さを巧みに活かした工夫が膨大に蓄積され、調整と風合いのある印刷物を生み出していたようだ。

「もう大阪ではここだけでしょう。近く閉じます」との話。昔は油臭いだけと思っていたが、今、見ると文化の香りが一杯だ。博物館的にでも残せないかと思った。

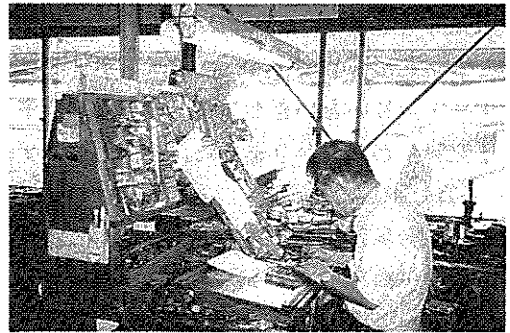
最新技術でも版下のお手本は活版時代

次は一転してディスプレイ（画面）がずらりと並んだ明るいオフィス。ここでは、電子写植機で印刷版下を作成している。写植とは写真植字の略で活字を拾う作業を機械化、字体をレンズで拡大縮小する原理で、それを電子化したのが今の主流だ。一字ずつ拾う原理は同じなため、活版同様に微妙な調整をしているらしい。

続いて、マッキントッシュのパソコン画面上で版下作成中のオフィスも見せてもらった。熱心に説明する若い社員にも関わらず、案内



活字がびっしりと並んでいる棚(しかも字づらは逆)。



拾った活字を版に組む。活字の間に薄い板を入れるなど微妙に調整する。写真上下：ナニワ印刷網にて

役の年輩の幹部がささやいた「コンピュータは、まだ荒っぽいですね」。

なるほど、最新印刷技術といえども、出来上がりは微妙な表現ができた活版版下にかかに近づくかで、日々、がんばっているということらしい。

細かい微妙さにこだわる、日本文化の特質を改めて思い知らされた感じだった。

(大阪事務所 しげもと さちひこ)

編集局から

前号の宛先確認ハガキの意見覧に、たくさんのご意見・ご感想をいただき、ありがとうございました。編集委員会では、読者の皆様からお寄せいただいたご意見を参考にさせていただき、今後もより充実した内容でニュースレターを発行していきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

戦後50年不発弾撤去騒動記

長谷川 めぐみ

ゴールデンウィーク前に、アルパック大阪事務所のあるO B Pで不発弾撤去騒動がありました。この付近一帯は砲兵工廠があって、終戦の前日に激しい空襲を受け、多くの方々が犠牲になっています。今もJR京橋駅の片隅に慰霊塔があり、当時の惨状を蘇らせます。

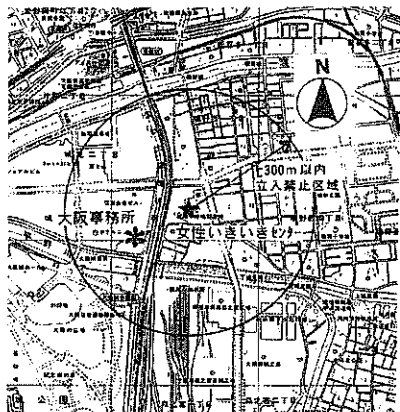
戦後50年を過ぎ、市立城陽中学校分校跡地で工事が進められている市立城東スポーツセンター・女性いきいきセンターで基礎工事中「不発弾」が見つかりました。当社からわずか150mの距離です。

陸上自衛隊による不発弾処理のため、4月27日(土)午前10時半から約1時間、現場から半径300m以内が立ち入り禁止になるばかりでなく大阪環状線の大阪一天王寺間が全面運休、当社も午前中の休日出勤を控えました。

以前アルパックでも吹田駅前再開発事業建設工事の設計監理中、現場から不発弾が見つかり、工事を中止し撤去した経験があります。

思いもよらない過去の遺物の出現に、昔にタイムスリップしたような不思議な気分ですが、この仕事場で、空襲の犠牲になった方々を思い、ご冥福を祈ります。何はともあれ、淡々と無事撤去されました。

(大阪事務所 はせがわ めぐみ)



(株)アルパックインターナショナルの事務所移転と社名変更のご挨拶

金井 萬造
霜田 稔

(株)アルパックインターナショナルは創立以来8年を迎え、この機に情報システム等の専門的コンサルタントである(株)メディアフュージョンとの一体的体制を確立するため事務所を尼崎リサーチインキュベーションセンターに移転しました。

今後、情報通信システムプランナー、デザイナークリエイターをメンバーに入れた新しい体制のもとに新会社として業務を進めてまいりますのでよろしくお願い申し上げます。

霜田は長い間お手伝いをさせていただいた関西文化学術研究都市も第2ステージプランの段階になり、自らも50代の半ばに達しました。人生の第2ステージとして、原点に立ち返り、地域社会や国際社会にささやかながらお役に立ちたく、努力していく所存です。これまでの所内外の方々との連携を強め、メンバーの成長を支援し、コーディネート役を果たしていく決意です。

アルパックとしても霜田稔と新しい(株)都市づくり研究所の新たな活躍と発展を念願し、支援と連携を図っていく所存です。

新しい出発ですが、これまで同様、ご指導ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

株式会社 都市づくり研究所
代表取締役社長 霜田 稔
取締役 榊原 淳、取締役 成瀬 厚司
〒660 兵庫県尼崎市道意町7-1-3
尼崎リサーチインキュベーションセンター 2F
☎ 06-415-2548 FAX 06-415-2556

新刊旧刊書評紹介

井上 ひさし 著

中公文庫

『ことばを読む』

紹介 田中 祥文

本のタイトルというものは往々にして読者の興味を引きつけるものです。

この本、「ことばを読む」という、読書をする上で当然ともいえる行為を正面から堂々と、そして、本の表紙を開こうと思う読者の手を止めさせ『ことばを読む』って何だ？と思わせるタイトルがついています。

本書は昭和55年1月から56年12月までの2年間「朝日新聞」文芸時評欄に掲載されたものが一冊にまとめられたものです。巻末に187冊の作品名と268名の人名が登場し作品名紹介と人物紹介で終わってしまうのではないかという不安を抱きながらいざ本編へ。

例えば、最初の題目「均質な時間と空間の中で」の冒頭「私たちの生きているくいま>とはどんな時代なのか。(中略)建築という専門領域から絶えず有効なことばを発信しつづけ私たちの混乱を整理してくれている原広司から、まず正確な定義をもらうことにしよう。」で始まります。ちなみに私、専門が建築のためか、“いきなり何で!”というのが実感。先の定義については触れませんが、建築関連の書籍であればいざしらず、この本のタイトルからすれば思いもよらない急展開であると言えます。

この項に関してもう一つ。建築家の原広司の次に大江健三郎の『同時代ゲーム』の一節(樹木を守るということ)が紹介されます。その一節に対して著者は、「樹木を伐り倒すことは象徴的な親殺しだという説があるが、だとすれば私たちは親殺し、そのむくいが均質空間地獄ということになる。」また、「均質空間を経過して行くのは、言うまでもなく

均質化された時間である。日常は、いわば巨大な砂時計で(中略)」といった具合に表現しています。著者独特の巧みな“ことば”のいいまわしが、現代社会あるい

は現代社会に生きる人間が抱えている問題に対して“創造”(建築)“破壊”(樹木の伐採)という実体のある行為を“ことばに置き換え思考する”という行為によって再認識させており、原文を読みさらにその書評を読むという構造が後押ししているといえます。

10年以上も前にかかれたこの本、建築あるいは都市をベースにした部分が要所に出てきます。少なくとも私自身、建築に携わる人間として、専門書または専門雑誌などの文章から教えられる、あるいは感じとることとは違った感覚を“ことばを読む”ということを通じて味わった気がします。次の本書の一節を個人の視点にたって読んでみて下さい。

『レトリックの復権という、見えないがしかし大きな波が打ち寄せて来つつある。(中略)ではなぜレトリックの復権か。近・現代はいわば科学万能の時代、「巧みに」表現することは科学には不必要なことで、「正確で機能的な」表現が近・現代の専制的な主人、この専制的な制度への問い直しのひとつ、また、物質=名詞の氾濫という時代の特徴、これに対する考えるコトバの側からの反乱、それこそがレトリックの復権だろう。』

(名古屋事務所 たなか よしふみ)



まちかど

変貌する水辺の風景

望月 博司

今年から7月20日が「海の日」として祝日になります。季節がら、これからは海に行く機会も増えることでしょう。

先日、新橋駅から「新交通ゆりかもめ」に乗って久しぶりに「お台場海浜公園」（東京都）を訪れました。日曜日ということもあって新橋駅は切符を買う人で長蛇の列。客層は家族連れ、カップル、お年寄りまで幅広い年齢層でした。

私が初めて「お台場海浜公園」を訪れたのは、昭和62年の夏、今から約10年程前になります。当時は、まだレインボーブリッジも無く、釣りや海水浴、ウインドサーフィンなどのマリレクリエーションを楽しむ若者以外、人はほとんどいませんでした。

しかし、現在の公園周辺は、中高層住宅が整備され、利用方法も散歩、サイクリング、ジョギング、写真撮影、イベント見学など多様化しています。水辺の風景が大きく変貌すると共に、人々の意識も大きく変わってきています。新名所として定着しつつある状況をみると市民は「水辺」という場所を都内の一要素として認識したといえるでしょう。

さて、現在臨海副都心開発の見直しが行われていますが、このような多様な市民ニーズに対応できる空間、例えば大きな芝生広場のようなものも検討してもらいたいです。

(東京事務所 もちづき ひろし)

アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673



10年前のお台場海浜公園



新名所になりつつある現在の公園



公園で日光浴を楽しむ人たち